

台南出土の肥前磁器-17世紀における海上交易に関する考察-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2970

台南出土の肥前磁器

－ 17 世紀における海上交易に関する考察－

野上建紀 李匡悌 盧泰康 洪曉純

1 はじめに

唐船による肥前磁器の海外輸出や鄭氏一派との関わりについては、山脇悌二郎がその著の中で具体的に述べている（山脇 1988）。氏は遷界令の結果、中国大陸から長崎に来航する唐船は専ら鄭氏船か、またはその勢力圏内からの発航船となり、それらの唐船が日本の磁器を中国南部のアモイ・広東方面、インドシナ半島のベトナム・シャム方面、あるいはバタビアに運ぶと述べる（山脇 1988）。そして、東南アジアに運ばれた肥前磁器を初めて総合的に紹介し、論じたものが 1990 年の佐賀県立九州陶磁文化館の特別展示「海を渡った肥前のやきもの展」であり、その図録掲載の大橋康二による論考である（大橋 1990）。その後、インドネシアやベトナムなど東南アジア各地の遺跡の中で肥前陶磁の研究が行われるようになった。

そして、坂井隆はインドネシアや日本の考古資料などから台湾鄭氏政権が大きな役割を担っていた可能性を早くから指摘した（坂井 1993）。考古資料から肥前磁器の海外輸出と特に鄭氏政権の関係に注目したのは氏が最初であろう。さらに謝明良や坂井隆はその鄭氏一派の本拠地である台湾で発見されたゼーランディア城出土の二彩刷毛目唐津大皿破片、左營遺跡出土の染付碗 3 片を報告した（謝 1996、坂井 1997）。台湾における初めての肥前陶磁の出土資料であり、年代的にも鄭氏一派の活動時期と一致するものであった。謝や坂井はこれらを鄭氏一党の貿易活動を傍証するものとした（謝 1996、2000、坂井 1997）。しかし、種類が少なく、また、典型的な海外輸出品が含まれていなかったため、その実態を知るにはさらなる資料の増加を待つ以外になかった。

一方、野上建紀は唐船による肥前磁器の大量輸出と肥前の生産機構の変化について述べ（野上 1994、1997）、鄭氏ゆかりの船をはじめとした沈没船資料から海禁政策下の中国磁器と肥前磁器との関係を述べた（野上 2001、2002b）。そして、2004 年に田中和彦、洪曉純とともにマニラで肥前磁器を発見した後、マニラへの中継地としてアモイ近辺と台南近辺を想定し、2005 年度より日本・フィリピン・台湾人研究者による共同研究を 3 年計画で始めた。

今回、新たに台南で発見された肥前磁器は 5 点である。内、4 点は台南県社内遺跡から出土したものであり、すでに調査報告書も刊行されており（李匡悌 2004）、盧泰康による分析も行われている。1 点は台南市海安



Figure.1 台南・安平・新市位置図

路地下街の工事中に採集されたものである。決して多い数ではないが、その中には東南アジアで広く出土が認められる製品や西アジアやヨーロッパ世界にももたらされている製品が含まれていた。台湾を一つの中継地とした肥前磁器の海外流通の実態を明らかにする端緒となりうる資料であろうと思う。

2 台南出土の肥前磁器

台南県新市郷（Figure.1）に位置する社内遺跡は 2003 年 7 月に発見され、発掘調査は台南県政府が中央研究院歴史語言研究所に委託して、2003 年 10 月から翌 2004 年 11 月にかけて行ったものである。計画リーダーには李匡悌があたり、発掘リーダーは朱正宜がたった。また、前に述べたように肥前磁器を含む陶磁器の産地・年代同定等の分析は盧泰康が行ったものである。そして、2005 年 3 月に李匡悌、盧泰康らとともに洪曉純、野上建紀が台南県新市郷を訪れ、陶磁器の写真撮影を行い、肥前磁器についてのみ実測作業も併せて行った。

以下、社内遺跡から出土した肥前磁器（Figure.2-1～4）を紹介する。また、台南市海安路地下街工事の際に採集された肥前の染付碗 1 点（Figure.2-5）も併せて紹介する。

Figure.2-1 は社内遺跡出土の染付見込み荒磯文碗である。肥前では 1650 年代中頃～1680 年代にかけて大量に生産された製品である。台南出土の染付見込み荒磯文碗は文様が簡略化されており、1660～1680 年代の有田周辺の諸窯で生産された可能性が高い。東南アジア各地の遺跡で出土が見られる。

Figure.2-2 は社内遺跡出土の染付碗である。高台内には「宣明」銘が入る。「宣明」あるいは「宣明年製」銘の入る染付碗は、有田では長吉谷窯、岩中窯、波佐見では辺後ノ谷窯などで出土している。いずれも 1660～1670 年代を操業年代に含む。海外ではバサリカン遺跡で出土が見られる。台南で確認されている染付碗の高台内銘は「宣明」あるいは「宣明年製」銘である。こうした銘自体が好まれた可能性もあるが、これらの銘の入る染付碗が出土する窯は比較的限られており、特定の窯場との関係を示すものである可能性もある。今後、注目すべき点であろう。

Figure.2-3 は社内遺跡出土の染付芙蓉手皿である。見込みは欠損しているが、花虫文を描いていたものと思われる。肥前では有田諸窯で 1660～1680 年代に生産された。特に猿川窯・稗古場窯などの内山諸窯や外尾山窯で出土する。質はさまざまであるが、バタビアのバサリカン遺跡、バンテン・ティルタヤサ遺跡、マニラのアユンタミエント遺跡などでも出土する（野上ほか 2005）。外尾山窯では 1660～1670 年代頃に操業期間をもつと推定される 3 号窯で出土する。ティルタヤサ遺跡は 1682 年にオランダに攻略された離宮跡であり、その出土遺物は 1682 年以前の可能性が高いものである（上智大学アジア文化研究所 2000）。さらにはメキシコシティの地下鉄工事の際にも同様の文様の染付皿が出土しているし、三杉隆敏はペイルートに残る伝世品について報告している（三杉 1986）。

Figure.2-4 は染付瓶の体部である。1660～1680

年代頃の有田諸窯の製品であろうと推定される。

Figure.2-5 は台南市海安路地下街工事の際に採集された染付碗である。「宣明年製」銘が入る。1660～1670 年代に有田内山で生産されたと推定される。

3 討論

（1）台南出土の肥前磁器と鄭氏について

台南で出土した肥前磁器の年代はいずれも 1660～1680 年代頃と推定される。特に 1660～1670 年代のものが主である。確実に 1650 年代以前の製品と見られるものはなく、また同時に確実に 1684 年の展海令以後の製品と見られるものもない。いずれも清朝による海禁政策が行われている間に海外輸出された製品とみることができる。

次にこれらが輸出された背景についてみていく。肥前磁器の海外輸出の記録上の初見は、山脇悌二郎によれば 1647 年長崎出帆のシャム経由のカンボジア向けの「粗製の磁器百七十四俵」である（山脇 1988）。そして、実際に大橋康二によって、ベトナムやインドネシアでは 1640 年代に生産年代をさかのぼらせることが可能な肥前磁器の出土が確認されている（大橋 1990）。

そして、慶安 4 年（1651）にはトンキンに向けてトンキン華僑の船が「かなりの量の粗製磁器」を輸出している。さらに 1656 年の海禁令以後の翌年 1657 年には 47 艘の唐船が長崎に来航したが、このうちの 38 艘は鄭成功の根拠地安海から来たものであったとしている（山脇 1988）。また、1658 年 11 月 5 日から 8 日

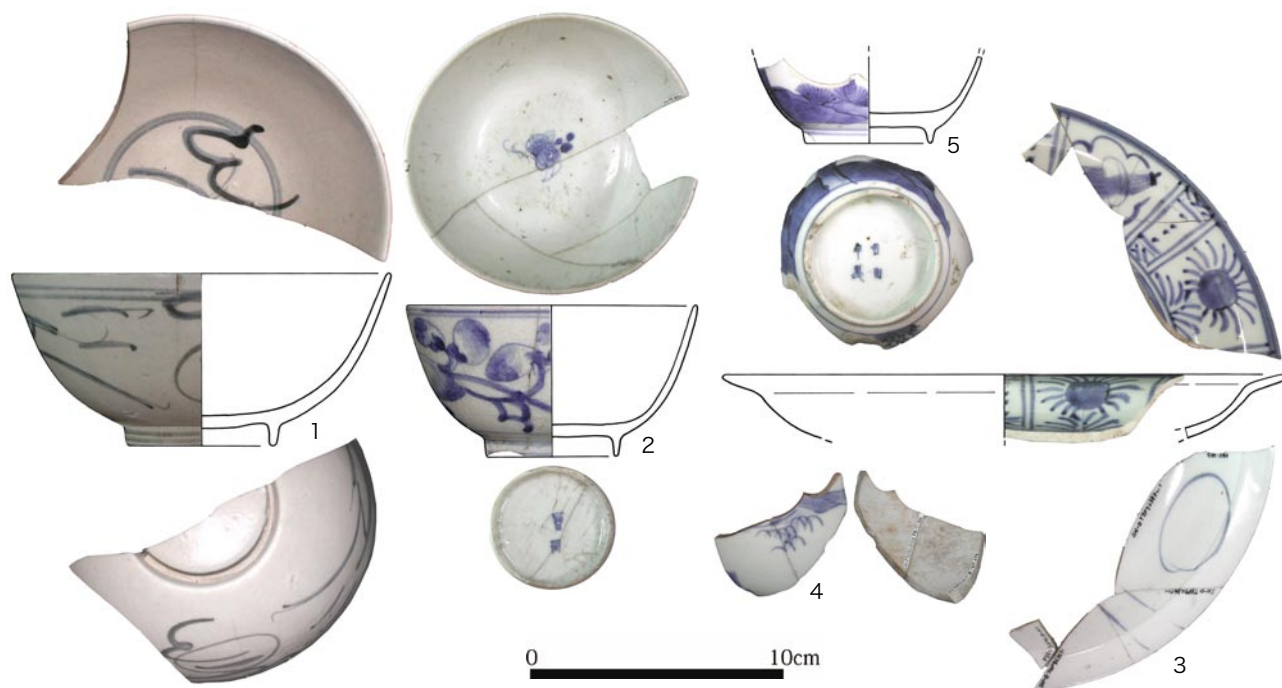


Figure.2 台南県社内遺跡出土遺物（1～4）・台南市海安路地下街採集遺物（5）

までに長崎を出帆した7艘の唐船はすべてアモイと安海に向い、大量の各種粗製磁器を積んで出港したこと、同月18日に中国に向けて出航した2艘の積荷はほとんど粗銅と磁器であったこと、そして、同月20日から28日までに中国に向けて出航した6艘の積荷もほとんどが粗製磁器であったことを示す(山脇1988)。

これら1650年代頃に海外輸出された「粗製磁器」には染付日字鳳凰文皿、粗製の染付芙蓉手皿、あるいは早い段階の染付見込み荒磯文碗などが含まれると考えられる。染付日字鳳凰文皿はベトナムで数多く出土しており、粗製の染付芙蓉手皿などは東南アジアの中で台南に最も近い肥前磁器の消費地であるマニラでも出土する(野上ほか2005)。これらは台南で出土している肥前磁器よりも相対的に古いものである。よって、鄭氏一派に関わるものとすれば、マニラなどで出土するこの時期の肥前磁器は台湾ではなくアモイや安海を経由したものである可能性が高い。

そして、鄭成功の軍兵は1661年に台湾を攻撃し、1662年には台湾長官フレデリック・コイエットが降伏する。一方、その同年、オランダ艦隊は清の海軍に協力して鄭經が拠るアモイ・金門・銅山島を攻略する(山脇1988)。以後、鄭氏一派は1683年に降伏するまで、台湾を清朝に対する反抗の拠点とした。台南で出土している肥前磁器はこの時期に該当する。年代的に見れば鄭氏一派との関わりを強く示唆するものとしてよからう。こうした時期に台湾に輸入された肥前磁器については二通り考えられる。一つは鄭氏一派を含めた台湾内部の需要に応えるためのもの、もう一つは台湾を中継地として他の地域に輸出するためのものである。染付碗、染付瓶などは海外輸出向けに生産されたと限定できないため、どちらの性格を有するものかわからない。その意味で主に東南アジア向けと考えられている染付見込み荒磯文碗、ヨーロッパ世界や西アジアへも運ばれた染付芙蓉手皿が出土した意義は大きい。それらは台湾を中継地として東南アジアに運ばれる可能性、あるいは東南アジアのパタビア、バンテン、マニラなどをさらなる中継地として南アジア、西アジア、ヨーロッパ、アメリカ大陸へと運ばれる可能性を有していた性格のものであるからである。台湾を中継地とした肥前磁器の海外流通の一端を示している。

そして、今後、注目されるのがアモイや金門島における状況である。鄭成功は台湾を本拠とする以前はアモイ・安海などを本拠としていた。現在、台南で確認されている肥前磁器より相対的に古い年代、すなわち、1650～1660年代の肥前磁器が新たに発見される可能性を考えることができる。台南と併せてこれらの地域や海域の状況を調べることで、鄭氏一派の活動と肥前磁器の関わりがより明らかにされるであろう。

(2) 17世紀におけるアジアの陶磁器流通について

社内遺跡では肥前磁器だけでなく、17世紀後半の中国青花も出土している。量的には中国磁器の方が多い。17世紀のアジアの陶磁器流通について、中国磁器と肥前磁器の関係をみながら考えていこうと思う。まず、17世紀後半の唐船の沈没船あるいは沈没積荷と考えられる資料をみしてみる。一つは鹿児島県吹上浜採集資料である(大橋1985)。採集地点から推測される遭難箇所を考えると、その積荷の陶磁器のほとんどが肥前磁器であることは当然である。むしろ注目すべきは少量採集されている粗製の中国青花碗(Figure.3)である。沈没船の場合、主たる積荷の産地が船籍と異なる例は少なくない。積荷よりはむしろ量的には少ないが、船員の使用品と推定される製品の入手地が船籍を示している可能性が高い。つまり、船の備品や船員の使用品と推定される遺物の方が船籍を示す場合が多いのである。彼らは陸上での生活を持ち込むことが多いからである。吹上浜で採集される粗製の中国青花碗は船上の使用品である可能性が高く、中国磁器と肥前磁器を生活用品と商品に使い分けていた可能性がある。そして、中国南部沿岸で発見されている東山冬海灘沈船遺跡、宝陵港沈船遺跡、汕頭広澳深水港沈船遺跡などは鄭氏ゆかりの船と推定されている。東山冬海灘沈船遺跡は「永曆」鑄造の貨幣が出土していることから、沈没年代の上限は永暦年間に求められる。また、鉄砲、銅銃、火薬などが出土しており、軍船と推定されている。あるいは武装した商船とも考えられよう。陶磁器も10余件出土しており、その中には内面に蕉葉を一枚描いた17世紀後半の青花皿(Figure.4)が含まれる。宝陵港沈船遺跡も「永曆通宝」が大量に出土する遺跡で、出土した陶磁器は明末清初の資料とされる。汕頭広澳深水港沈船遺跡は陶磁器出土の報告はみないが、出土した銅銃には「国姓府」の文字が陰刻されている。永暦4年(1650)に鄭成功は潮陽(今のスワトウ一帯)に至り、洪旭に駐鎮を命じており、この沈没船は鄭成功配下の洪旭の管轄の船の一つと推定されている。中国南部沿岸で発見されている鄭氏ゆかりの沈没船ではこれまで肥前磁器は確認されていない。東山冬

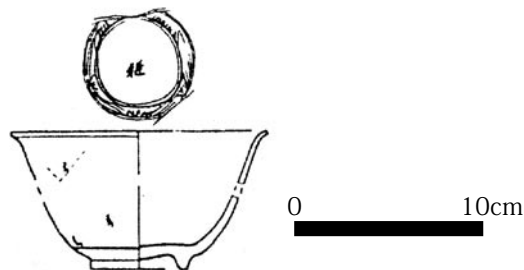


Figure.3 鹿児島県吹上浜採集遺物
(大橋1985掲載図版をトレース)

海難沈船遺跡、宝陵港沈船遺跡などで確認されているのはいずれも中国磁器である。これらの船は軍船と考えられており、陶磁器を積荷の主体としていないので、出土する中国磁器は船上の使用品であったと考えられる。つまり、吹上浜採集資料と同様に中国磁器と肥前磁器について生活用品と商品と使い分けていた可能性がある。すなわち、鄭氏にとって肥前磁器はあくまでも商品であって、日常使用したのは中国国内と同様に中国磁器であった可能性が考えられるのである（野上 2001）。言い換えれば清朝による海禁政策下であっても生活用品としての中国磁器は入手可能な可能な時期があったのである。吹上浜で採集されている粗製の青花碗は社内遺跡でも比較的良好に見られるものであるし（Figure.5）、蕉葉文の小皿（Figure.6）もまた見られる。

ここで今一度、清朝の海禁政策について考えてみたい。展海令以後、すぐに東南アジア市場において肥前磁器が中国磁器にとって代われ、多くの肥前の窯が国内向け主体の窯に転換したり、廃窯となることを考えると、明らかに中国磁器の輸出は抑制されていたのであり、1684 年の展海令に至るまで海禁政策はある程度機能していたとみるべきであろう。しかし、その抑制の度合いは 1656～1684 年までの期間、一様であったわけではない（野上 2002a）。あるいは地域や社会層によっても異なっていた。例えばベトナムでは出土する肥前磁器は 1650～1660 年代のものが多く、それ以降の製品が少なくなることから、東南アジアでも中国南部に近い地域では展海令以前の 1670 年代には粗製の中国磁器が相当量流入している可能性を指摘できる（野上 2002a）。海禁政策下の陶磁器流通の状況は鄭氏一派の勢力の盛衰、清と鄭氏の両者の制海権の推移、海禁政策自体の強度などのバランスの中で推移したと考えられる。

1650 年代後半から 1660 年代前半にかけて、すなわち、1656 年の海禁令、1661 年の遷界令などを公布した頃については、台湾海峡も緊迫した情勢にあり、海禁政策が徹底されたものと思われる。ここで生産地側からみると、16 世紀末～17 世紀前半にかけて、福建の漳州窯などは海外輸出によって急成長しており、海外輸出向けの製品の割合も比較的高いものであった。そのため、海禁政策によって大きな割合を占めていた海外市場を失うと生産規模を縮小するか、その生産能力を国内向けに転換せざるをえなくなる。しかし、国内向けに転換したと言ってもそれが中国国内だけで消費されたわけではない。海禁政策によって輸出が抑制された中、海外輸出向けにつくられた製品は少なくなったが、福建・広東地方の磁器は東南アジアの華僑世界を中心に、あるいはそれ以外の地域にも運ばれている。社内遺跡に見られるように清朝に抵抗を



Figure.4 東山冬海難沈船遺跡回収遺物



Figure.5 台南県社内遺跡出土中国青花碗



Figure.6 台南県社内遺跡出土中国青花皿

続けた台湾においても出土するし、中国南部沿岸の鄭氏ゆかりの船からも出土する。インドネシアやマニラでもやはり相当量出土する。

そして、フォルカーによる『磁器とオランダ連合東インド会社』（フォルカー 1979-1984）の中の 1673 年の記述は興味深い。「マカオに近いランパコで彼ら自身の自衛のもとで多数のオランダの〔自由〕船と中国のジャンク船が碇をおろし、かれらは広東から来る中国系タタール人と取引きしている。中国皇帝は、自国の船舶や中国人に外国との貿易をかたく禁じているにもかかわらず、名目上彼らはマカオに来ていることになっていて、実際には、マカオに近いラムパコまで出かけているのだ。」（フォルカー 1979-1984、連載 44 の p56）とある。1661 年の遷界令から 10 数年後にはマカオ近くで海上交易が盛んに行われている。このことは先に述べたベトナムの状況とも矛盾しない。

一方、景德鎮の磁器についてはどうか。やはり全てではないにしても国内向けに転換せざるをえなかったであろうし、その場合、中国沿岸部に近い福建・広東地方の磁器に比べると、輸出されにくい状態であったと考えられる。海禁政策下に限定される製品の抽出が困難であるため、どの程度海外に出回ったかはよくわからない。海禁政策時期の陶磁器が主体のティルタヤサ遺跡では相当量の景德鎮の磁器の出土が見られる

が、離宮跡という遺跡の特殊性も考慮しなければならない。

最後に展海令以後のアジアの陶磁器流通について少し述べよう。展海令によって中国磁器が本格的に海外市場に出回るようになる。CON DAOをはじめ、17世紀末～18世紀の沈没船資料に見られるように景德鎮では海外輸出向けの製品を大量に生産するようになる。また、福建・広東地方の磁器は相当量すでに出回っていたとはいえ、抑制の反動であるかのように海外により一層出回るようになり、東南アジア市場では18世紀に徳化窯など福建・広東系の磁器の需要層が広まることになる。消費者側の購買能力と流通運搬能力の向上を背景としたものであるが、生産地側から見た場合、海禁政策下、国内向けに転換し、低コストによる量産化を行った結果でもあろう。展海令以後は低廉な印青花や押型成形による碗・皿が東南アジアをはじめとした地域一帯に流通していく。一方、日本の場合、大橋康二が指摘するようにヨーロッパなどに向けられた輸出は継続されるが、東南アジア自体の市場は失う結果となった（大橋 1990）。波佐見など有田周辺の窯場は海禁令以後に海外需要の増加に応じて急成長した窯場であり、海外需要の占める割合が有田などより相対的に高かった（野上 1997）。そうした窯場では中国磁器の再輸出の本格化によって海外市場を失うと生産コストの低減を図り、新たな国内需要の拡大を目指した。そのことが日本国内市場に磁器を行き渡らせる結果となった。日本では18世紀にいわゆるくらわんか碗皿が日本全国に普及することとなったのである。

4 おわりに

清による17世紀後半の海禁政策は周辺諸国に大きな影響を与えた。海禁政策によって本格化した肥前磁器の海外輸出がその生産地に与えた影響が大きいことは言うまでもないが、その時期の生産能力の拡大が後の日本の磁器使用の普及につながっている。そして、同時に展海令以後は世界的規模で磁器使用が普及していくようである。

海禁政策下の中で主要な役割を果たした集団の一つが鄭氏一派である。それは肥前磁器の海外輸出にとどまるものではない。その本拠地である台湾を一つの中継地とする海上交易の全体像を知るにはまだ資料が不足しているが、今回の資料は今後の研究の可能性の大きさを示すものと考えられる。

謝意

今回の論考を書くにあたり、以下の方と機関のご協力を得た。芳名を記して謝意としたい。

朱正宜、台南科学工業園区考古文物陳列室（TNSIP

Gallery of Archaeology）（順不同・敬称略）

今回の研究は平成16年度（2004）西田記念東洋陶磁史研究助成を受けて行った。

《参考文献・引用文献》

- 大橋康二 1985「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」『三上次男博士喜寿記念論文集』陶磁編 平凡社 p275-291
- 大橋康二 1990「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館 p88-176
- 大橋康二・坂井隆 1999「インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告』82
- 坂井隆 1993「肥前陶磁の輸出と鄭氏・バンテン王国」『東南アジア歴史と文化』22
- 坂井隆 1997「台湾のイマリ」『陶説』533
- 坂井隆 2002『港市国家バンテンと陶磁貿易』同成社
- 謝明良 1996「左營清代鳳山県旧城聚落出土陶瓷補記」『台湾史研究』3-1 中央研究院台湾史研究所
- 謝明良 2000「台湾安平と左營遺跡出土の陶磁器」『バンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書』上智大学アジア文化研究所・バンテン遺跡研究会・インドネシア国立考古学研究センター
- 謝明良・劉益昌・王淑津・顔廷仔 2003「記熱蘭遮城遺址出土の十七世紀欧州和日本陶瓷」
- 上智大学アジア文化研究所 2000『バンテン・ティルタヤサ遺跡発掘調査報告書』
- 野上建紀 1994「応法地区における窯業について」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館研究紀要』第3号 p1-54
- 野上建紀 1997「肥前における磁器産業について」『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館研究紀要』第5号 p1-53
- 野上建紀 2001「沈船資料にみる明末～清朝磁器」『貿易陶磁研究』No.21 p63-74
- 野上建紀 2002a「海外輸出された肥前磁器」『近世日越交流史』柏書房
- 野上建紀 2002b『近世肥前窯業生産機構論』
- 野上建紀・Alfredo B.Orogo・田中和彦・洪曉純 2005「マニラ出土の肥前磁器」『金大考古』48
- フォルカー 1979-1984「磁器とオランダ連合東インド会社」（1）～（47）井垣春雄校閲、前田正明・深川栄訳『陶説』312-370
- 三杉隆敏 1986『世界の染付6』同朋社出版
- 山脇悌二郎 1988「唐・蘭船の伊万里輸出」『有田町史』商業編 I 有田町史編纂委員会 p265-410
- 李匡悌 2004『三舍及社内遺址受関水利工工程影響範圍搶救考古発掘工作計劃』